論文と資料紹介

講演録

# 国士舘創立と吉田松陰

国士舘大学文学部教授・国士舘史資料室長
佐々　博雄

＊本稿は、世田谷区立世田谷図書館・若林町会共催、第六回若林歴史講演会（二〇一四年一〇月二六日、於国士舘大学世田谷キャンパス多目的ホール）の録音をもとに加筆・修正を施したものである。

佐々博雄文学部教授

皆様こんにちは。私、只今ご紹介にあずかりました文学部で近代史を教えております佐々博雄と申します。あわせて現在、国士舘史資料室の室長をしております。今日は、この会でお話をさせていただく機会をいただきありがとうございます。国士舘も三年後には創立百周年を迎えるということで、目下国士舘史の編纂中であります。来年の春には史料集、各一〇〇〇頁ほどの上・下二巻を出す予定でおります。また、三年後には通史編の刊行を予定しています。国士舘は、創立から吉田松陰、あるいは吉田松陰を祀った松陰神社と、色々関わりをもっています。また、この世田谷という地域との関わりもあるということで色々な史料が出てきております。先ほど松本剣志郎先生がお話されたような松陰の細かい研究というところまで、私はいっておりませんので、今日は、国士

舘と吉田松陰、それから松陰神社とのつながりというかたちで、お話をさせていただきたいと思っております。また、最後に、個人的なことではありますが、私の曽祖父の叔父が吉田松陰と親しい関係にありました。それについても後でお話させていただきたいと思っております。

まず、国士舘の沿革と松陰との関係という視点から先にお話させていただきたいと思います。

## 国士舘の創設と世田谷移転

国士舘は、大正六（一九一七）年、一一月四日に、麻布笄町（こうがい）一八二番地、現在の南青山七丁目、日赤病院のそばで産声を上げています。この国士舘、小さな塾であったわけですけれども、その母体となったのが「青年大民団」という団体です。これは主に早稲田大学の武道の教員、それから学生、とくに福岡出身の人々を中心に、時の天下国家といいますか、大正初期の非常に混乱した思想状況の中で、社会教化を目的とした、そういう団体から発足しています。その中心人物の一人が、柴田德次郎で、早稲田大学の柔道部に所属していました。彼は福岡市の南方、別所というところの出身ですけれども、苦学生として上京し、芝中学から早稲田大学に進んで、青年大民団をつくっていくわけです。ただ、そういう苦学生が、塾や組織をつくるのは難しいわけですが、それをサポートしたのが、当時福岡出身で、赤坂の霊南坂にいた頭山満という福岡玄洋社の中心人物や、代議士で大臣になった野田卯太郎などです。そういう人物たちが若い彼らをサポートしていく。後藤新平なども関わってきますが、そういう中で国士舘ができる。レジュメの最初の方に「国士舘の前身」として経緯を書いていますが、大正二（一九一三）年にできた青年大民団は、頭山満、三浦梧楼、緒方竹虎、中野正剛、柴田德次郎らが、参加しています。そして大正六年一一月四日に、当時大民団の本部事務所に、夜学塾として併設されたのが国士舘の始まりであります。

では、なぜ麻布笄町からこちらの世田谷の地にやってきたのかというと、当然夜学ですけれども、一階に八畳と六畳、二階に六畳と、小さい塾ですから、人がだんだん増えて、移転の必要が出て来るわけです。英語も教えたりしておりますから、当時の大学に行ったり、一高（旧制の第一高等学校）に行ったりという東京都下の学生たちが集まって勉強していて狭くなってくるわけです。当初は、今、吉祥寺に成蹊大学がありますけれども、これ

は根津財閥の根津家の所有地でして、当初はそちらの方に移転するようになっていたわけです。ところが大正七（一九一八）年、塾が出来て一年たった秋に、青年大民団が、今まで日本の国のために殉じた人たちをお祀りしようということで、国士祭を松陰神社で催した。その際に、神官の方から、実はこの脇に学校に適した土地があるが、どうだろうかというような話があって、かたわらには吉田松陰が祀られている松陰神社があり、そして西には井伊直弼の豪徳寺があり、烏山川が回っている高台に勝国寺がありますが、その高台の場所だということで、立地的にも教育的にも非常に良いということで、ある意味即決的な動きの中で、この世田谷に移転するという方向になり、この場所に移転が決まったわけです。国士舘は、ここに移転してくると、大正八（一九一九）年の一一月に財団法人になります。その前に、現在、国士舘大学の中央に大講堂という古い建物がありますが、これを、大正七年の末頃から建設準備にとりかかったわけです。そんなにお金があるわけありませんから、福岡は筑豊の石炭事業者たちからお金を寄付してもらっています。麻生、貝島、安川という人たちです。安川の方は、今の九州工業大学の前身になる専門学校を作っていて、そちらにお金がかかるからということで、あまり多額の金は出ておりませんが、麻生家などを中心に寄付金を集める。あるいは東京の方では、大手の三井とか、住友とかからお金を出してもらっている。これで大講堂など建物を造って、落成式には地域の方々にも参加していただいております。その一一月に財団法人ということになるわけです。ですから、まさに松陰神社での国士祭というのが、移転のきっかけになって、今年はそれから九五年、創立からは九七年、三年後が百周年になりますが、九五年間、ここ世田谷に居るわけです。

それでこの国士舘創立の関係者には、先ほど述べた野田卯太郎、それから一番大きな影響が、渋沢栄一がサポートに入るということで金銭的にもいろんな援助があり、ある程度学校の基礎ができる。それから大正一四（一九二五）年、一五年になりますと、すでに大学令が出ておりますので、国士舘も大学を目指して動き出す。ということで徳富蘇峰もそこに関わってくる。そのほか小村欣一、田尻稲次郎。田尻は専修大学の創立にも関わっております。それから長瀬鳳輔、栗野慎一郎、上塚司というような方々が、国士舘に関わってくる。最初は、法令に基づかない学校というようなかたちで、大正八年一一月に高等部、それから中等部というのがつくられます。

大正一二（一九二三）年には、九月一日に関東大震災

講演風景

が起こります。国士舘の建物は地盤も良かったのでしょう。ほとんど影響がなく、関係者が避難してきたり、あるいは一時この地域の方々が避難し、それを援助するというようなことも行っております。大正一四年になりますと国士舘の中学校、文部省令に基づく学校というものができるようになってくる。それから関東大震災以降、この世田谷の地は、高台の方に町が広がってきまして、玉川電車（現東京急行電鉄世田谷線）あたりも通るようになる。私鉄ができてこの近郊に人が移住してくる。そういう事情で、荏原郡の西部六か町村が、国士舘の建物を貸してくれないかというようなことで協議がありまして、六か町村合同経営の国士舘商業学校が創られます。これは夜学です。この校長には、世田谷代官大場家の大場信續（おおばのぶつぐ）という方が初代の校長になっています。この方は、先ほど松本剣志郎先生のお話に出ましたように、松陰神社は、明治一五（一八八二）年に神社になりますが、新しい神社というのは氏子がいない。さすがに井伊家の代官であった大場家ですから、神社のサポートを、当主が就くということをひかえて、当家のお孫さん信續氏が氏子総代になっています。そういう地域のサポートがあって、松陰神社が支えられるのですけれども、その国士舘の商業学校の校長も大場家にお願いするわけです。それ

で基本金三万円くらいを各町村分担して負担するという、そういう学校ができるわけです。

大正一五（一九二六）年には、国士舘の大学設置構想があったわけですが、やはり大学というのは創設に数百万円のお金がかかると。そういうこともあって、まず専門学校が創られます。昭和四（一九二九）年に専門学校ができる。昭和五（一九三〇）年には、ブラジルのアマゾンに移住し、事業を起す人材を出すというような高等拓植学校というのができ、また大陸の方に学生を養成して出すという満蒙科が昭和七（一九三二）年に増設されます。戦後、ＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）等の政策、文部省からの指導もあり、国士舘という学校名は至徳学園に変更されます。その後、サンフランシスコ講和条約以降、昭和二八（一九五三）年には国士舘短期大学が創られ、理事長には柴田徳次郎。そして、昭和三三（一九五八）年に、国士舘大学が創られていくということになります。

## 国士舘松下村塾（景松塾）の建築と松陰神社への寄進

国士舘創立以前、青年大民団が発行していた機関誌は、『大民』という雑誌なのですが、大民同人が、その雑誌に「宣言　活学を講ず」というものを載せます。これが実は、国士舘の設立趣意書のもとになるわけですが、その中に、国士舘は、吉田松陰の松下村塾を目標として創立するということを述べています。世田谷にできた最初のころの国士舘の教育は自給自足。先生も生徒も皆一緒に村長を選んで、国士村という共同生活のなかで自給自足をやっています。松下村塾の教育が理想として語られているわけです。

そのような中で、非常に松陰神社と関わっているものとしては、模造松下村塾があります。今、世田谷の松陰神社の拝殿の横に松下村塾があります。あれは実は国士舘から寄贈されたものなのです。模造松下村塾。本物はもちろん萩の方にあるわけですが、当初は、国士舘から移されて、鳥居のすぐ左側の方にあったのですが、神社の改装などで、現在の場所に移っている。実はこれが国士舘にあったときには、景松塾（けいしょうじゅく）というふうに呼んでいました。

吉田松陰没後五〇周年を記念して、昭和二（一九二七）年から三年、松陰神社が改装されます。その時に国士舘の方では、その古い拝殿、これまでの神社の拝殿をもらっています。それを、学内に移して、国士神社というふうに命名したわけです。その国士神社の横にこの景松塾、

模造松下村塾というものを造った。レジュメにもあるように、当時、国士舘専門学校の校長・事務取扱の尾高武治らが修養道場として造ったのが、その模造松下村塾、いわゆる景松塾といわれているものです。史料を読んでみます。

我等同人先生の忠孝を景慕し、其の節操に感激し、一死能く維新中興の天業を翼賛せる其の大義の凛烈なるに発憤し、相談して地を松陰祠畔に相し、塾舎を起して国士舘を称し、日夕先生の霊に親炙して、先生の如き殉国の烈士を養成すべく、努力すること茲に年あり。嚮に松陰神社の改築なるや、旧本殿を乞うて校舎幽邃の境に移し、松陰先生を始め殉国の烈士を祀りて国士神社と称し、毎朝授業開始に先立って教職員学生一同之を礼拝し、其の遺徳を景仰して、日毎に殉国の精神を新たにするを常とす。（中略）是に於てか遂に松下村塾と全く同一なる塾舎を模造し、先生の教育における根本精神を継承せんと決意するに至れり。（「国士舘景松塾建設趣意書」『国士舘中学校校友会報』二号、昭和一三年三月）

これは中学校の校友会会報に尾高が書いている部分で

昭和 13 年 11 月　新築の景松塾（右から２人目が尾高武治）（松林明氏所蔵）

す。

この建築経過は、模造というくらいですから、まさに現地の萩の松下村塾とほとんど一致して、変わらないものを造っているのです。これは昭和一三（一九三八）年の三月に、建設計画が出まして、萩市松本村の、そこは松陰が出た所ですが、厚東常吉に建築の一切を依頼する。実際に、尾高が萩に行きまして、材料から何から打ち合わせをしているのです。

それで建築材料は、すべてその萩において、吉田松陰にゆかりのある材料を集め、松下村塾の寸法に合わせ、一度現地で組み立て、そしてそれを移築するという。念には念を入れた建築を行っているわけです。

また使った木材。これは毛利藩の代官屋敷の古材を使っている。それで偶然にもその古材というのは、松陰の養母の生家の所有した山林、そこから切り出された古材であったということがわかる。

それから屋根瓦。これは毛利藩代官屋敷の古瓦。元々その代官屋敷に使われた古瓦を使用していて、それで毛利藩のお抱えであった瓦職人の阿川という方が焼いた瓦を使っています。ですから松陰神社に行かれて、今の松下村塾を見ますと、瓦に「阿」の文字が入っている。その阿川いう人の焼いた瓦をそのまま持ってきている。

それから、周囲の玉石は、松陰生家の杉家の下の水無川の河原から集めて、持ってきた。その石を松下村塾の石と並べて、同じ大きさのものを選んで、そして、その石に番号を付って、東京に送ってきた。数は四〇〇個ほどといわれています。

それから、上塗用の壁土は松下村塾で使っているものと同じ質のもの、木舞・雨樋の竹も同様に萩から持ってきている。

また、松下村塾の一〇畳間の柱に刀傷がある。これは松陰が幕府から処置を受け、これに門下生が怒って傷を付けたという謂れのある部分ですけれども、そういう傷跡も付けている。障子・襖の引き手の形、その付け方、付け具合、畳の敷き方、松陰が休憩したとされる踏み天井の二階、松陰の使った机、これは萩で作ったものです。すべて、萩の松下村塾に模して作った、とこういうわけです。

そういう状況の中で、昭和一三年の一二月七日に竣工式が行われる。それで昭和一四（一九三九）年一月に、国士舘の大講堂で竣工報告式と、その後、九段の軍人会館で「景松塾竣工記念吉田松陰先生を偲ぶ会」というのを開いております。

昭和一六（一九四一）年の一一月に、松陰神社に寄付

をするということが決まりまして、「寄付並移築許可申請書」を提出し、昭和一六年の一一月一四日、松陰神社の社司である斎藤氏ほか五名から東京府知事に申請し、許可書が出ています。その移転費用一切は、国士舘の尾高氏が負担するということになっています。それでこれはどういう目的にするかというのが、次のように出てきます。

「・・・隣接地国士舘校庭ニ建設シアリシ模造松下村塾ヲ、建設者代表尾高氏ニ依リ今般寄附申出有之候ニ就テハ、神社境内ニ移築シ記念物トシ、或ハ修養道場タラシメント念願致ス次第ニ御座候・・・」

「・・・神社ヲ通シテ社会教化ノ資ト可致候・・・」

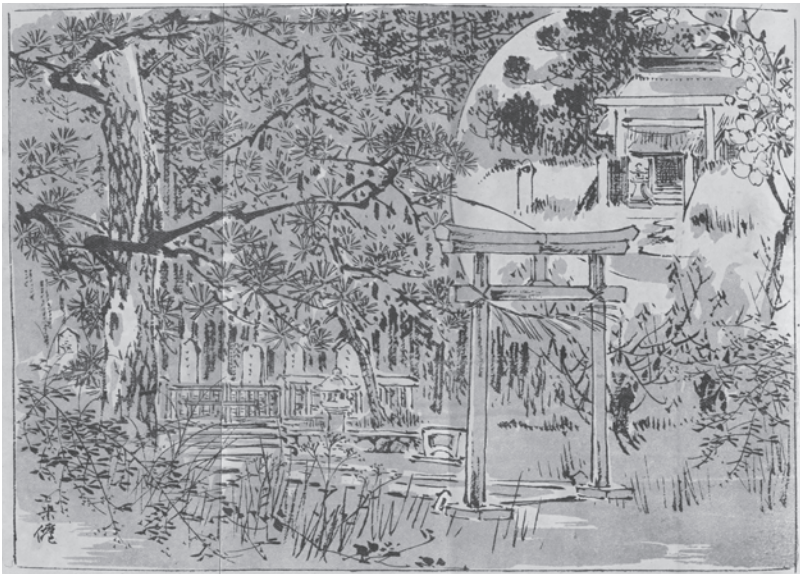
神社で社会教育等に使ってもらいたいということなのです。レジュメのなかの写真が景松塾。国士舘時代の模造松下村塾です。

## 吉田松陰と関わりをもった人びと

それから次は、徳富蘇峰。先ほど松本剣志郎先生の方で、蘇峰の弟徳冨蘆花の著した書、最初の松陰神社につ

昭和 15 年 3 月　景松塾全景

いての紹介等があったわけですが、吉田松陰がかなり有名になるきっかけがあったわけです。最近でいいますと、坂本龍馬をＮＨＫ大河ドラマで福山雅治が演じてブームになる。坂本龍馬にしても、基本的には日露戦争の際に、夢の中で皇后の枕元に立ったということで、海軍の創始者というようなかたちで非常にメジャーになっていくわけですが、まさにメジャーにしたのが、先ほどいった徳富蘇峰。蘇峰は、国士舘の維持委員の一人でもありますし、戦後の至徳学園の名称である「至徳」という名前を付けたというふうにいわれておりますが、この徳富蘇峰が明治二六（一八九三）年に著した『吉田松陰』（民友社、一八九三年）がきっかけになるのです。蘇峰は吉田松陰を革命児というふうな位置づけをしています。最後には第二維新という言葉が出てきます。要するに明治維新をやり、議会制も発展してきたが、蘇峰の目から見ると、結局その後、松陰先生のその革命をまたやらないといけないというわけです。これが再版を重ねてベストセラーになります。そういうなかで後年、いわゆる大正維新などにつながっていくと想像されるわけですが、ちょうどこの本が出版された明治二六年というのは、日本の帝国議会が始まって、第五議会、第六議会というのは非常に議会が混乱した時期なのです。それで、もうこれでは



久保田米僊画「松陰神社之図」

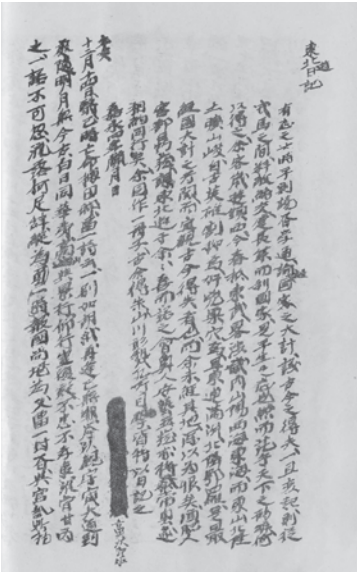
ちょっと日本の議会制度が危ういという時に、蘇峰の『吉田松陰』が出版され、第二維新という文言の背景になっているわけです。

それからこの蘇峰の『吉田松陰』には、最初の方に挿絵があります。これはレジュメの一番最後を見ていただきますとわかるかと思いますが、この図は石版刷りの折込になっています。この絵は、日本画家の久保田米僊（べいせん）という人が描いています。これは蘇峰の『国民新聞』の社員として、日露戦争にも従軍していた彼が描いたものです。それから、これも石版刷りで、折込に入っていますが、横にちょっと小さく「遊」と書入れがありますが、「東北遊日記」、これは、最初に吉田松陰が、江戸から水戸を経て東北に行った時の日記です。この日記の所蔵について、解説がありますが、これは、後に、養子に行って高原という名前になっておりますけれども、佐々淳次郎という人物が所蔵していたものを掲載したとあります。それで、佐々（高原）淳次郎とはどういう人物かというと、吉田松陰は、有名な『留魂録（りゅうこんろく）』から『講孟余話（こうもうよわ）』とか色々書いていますが、その中に『回顧録』というものがあります。その『回顧録』は、松陰が下田からの海外渡海に失敗し、捕まって牢獄に入ったことを日記風に回顧したものですが、渡海の前に惜別の宴を開いていることを書いています。これはレジュメの中に、「安政元年三月、宮部鼎蔵（みやべていぞう）、永鳥三平（ながとりさんぺい）、佐々淳次郎（さっさじゅんじろう）などと惜別の宴を開く」とあります。松陰は、結局、海外渡航を企てるが失敗して、伝馬町の牢に投獄される。その後、野山獄に送られていくわけですが、松陰から渡海をするということを打ち明けられるのが、宮部鼎蔵、永鳥三平、佐々淳次郎ら数名であったことを書いているわけです。

私も実は熊本の出身でありまして、この佐々淳次郎というのは、私の曽祖父の叔父にあたる。それで彼らは何をしたのかといいますと、ご存じのように肥後勤王党として活動しています。この後宮部鼎蔵は、池田屋事件で新選組に暗殺されています。佐々淳次郎は、宮部の門下で、維新後に『肥後藩国事史料』という、これは維新史研究ではかなり重要な史料となっておりますが、肥後細川藩の色々な維新期の動きを最初に編纂したメンバーの一人でもあります。

それで彼らは、この松陰と別れる時、宮部鼎蔵は、松陰の持っている刀と自分の刀を強制的に交換する。それから永鳥三平は、世界地図を渡す。佐々淳次郎は、松陰が渡海するために色々身辺整理して非常にみすぼらしい恰好をしていたので、路費として金五両と自分が着ていた着物を渡す。松陰は、そんなわけで非常に感極まった

という記述が『回顧録』に出てくる。なぜそのような関係ができたのかというと、吉田松陰が最初、嘉永三（一八五〇）年に熊本にやって来ると、そこで、横井小楠や宮部鼎蔵などと親交を持つ。宮部鼎蔵は一〇歳ほど上で、松陰と同じ山鹿流の兵学者です。その宮部の弟子の佐々淳次郎は、吉田松陰の一つ年上で、同世代なのです。だから松陰とは気が合う。それで淳次郎とも色々話があったようです。「東北遊日記」というのは、松陰が最初に脱藩し、宮部鼎蔵と同行した記録です。そういう関係があって、この日記が佐々淳次郎の手元に残っていた。実は、その後の、嘉永六（一八五三）年にも松陰は熊本に来ます。その時、松陰に淳次郎が渡したのが、前田利家の桶狭間の戦いの絵です。利家は織田信長の家臣になるわけですが、当時信長から遠ざけられて、桶狭間の戦いで活躍して、その絵を描かせるわけです。それは馬に乗って、敵将の首を鑓の先や鞍に付けている絵なのです。前田家にもその絵は残っていますけれども、佐々家にも模写したものが伝わっていて、熊本に来た松陰に淳次郎が渡した。それで松陰は非常に感激して、自分も現在、世間から遠ざけられているけれども、この絵を励みに反省していたようです。その後、松陰は、絵の上に画賛を載せています。これは、下関市立長府博物館に残っておりまして、今は文書館の方に移っているかもしれませんけれども、画賛には、この絵を淳次郎に貰ったのだと、そ



「東北遊日記」

「前田利家桶狭間凱旋図」
（下関市立長府博物館所蔵）

れで自分はこれを見て反省しているというようなことが書いてあるのです。「気義人なり」と「義の人」だというようなことが、賛に書いてある。そういう関係があったのです。それで松陰の『回顧録』等でも彼らが出てくるというわけです。そういう活躍があるので、『吉田松陰』の「東北遊日記」最初の石版は、これが最初に世に出たものだろうというふうに想像がつくわけです。

なお、国士舘顧問であった頭山満の親友、佐々友房は、佐々淳次郎の甥にあたります。

私の話は、国士舘と松陰神社、それから吉田松陰の関わりということでお話いたしました。それに、松陰と佐々淳次郎あたりをからめて徳富蘇峰の明治・大正期の第二維新という話もいたしました。時間が参りましたので、話を終わりたいと思います。

国士舘も三年後には、創立百周年を迎えます。また、世田谷に移転して九八年になります。本日は、世田谷地域と共に成長してきた国士舘について、講演の機会を与えていただきありがとうございました。地域と共に国士舘が成長してきた一端をご理解いただいたことと存じます。今後とも、地域との関係を大切にしていきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。